【機密性２・公表後機密性１】

【外部委員未確認】

函館地方裁判所委員会（第４３回）及び函館家庭裁判所委員会（第４３回）議事概要

（函館地方・家庭裁判所委員会事務局）

１　日時

令和５年６月２６日（月）午後３時００分

２　場所

函館地方・家庭裁判所５階大会議室

３　出席者（敬称略）

地 裁 委 員　　木原由貴、橋本祐子、川原田浩康、堀哲也、星野立子、前原浩明、五十嵐浩介

家 裁 委 員　　南部淳、澤村洋子、三國富美子、白幡俊一、岩村敏次、渡邉圭太、延廣丈嗣

兼 務 委 員　　三木素子、重名卓史

庶　　務　　函館地方裁判所事務局総務課長　小林哲

４　議題

函館地方・家庭裁判所における採用広報について

５　議事

(1) 傍聴の許可

委員会は、司法修習生１人について、本委員会への傍聴を許可した。

(2) 委員長の選任及び委員長代理の指名

委員長は、地方裁判所委員会の委員長代理として五十嵐委員を指名した。

(3) 前回委員会の議題（裁判所の調停手続の運営と実情について）についての委員会終了以降の取組状況の説明

(4) 今回の議題についての裁判所説明

(5) 意見交換

別紙のとおり

(6) 次回委員会について

ア　日　時　令和５年１２月１１日（月）午後３時

イ　テーマ　裁判手続を安定的に運営していくための方策（裁判員裁判への参加を促進するための広報活動を中心に）

以　上

別紙　意見交換の概要

「函館地方・家庭裁判所における採用広報について」

（委員長）

採用広報については、組織課題の一つとして取り組んでいるところですが、近年は、そもそも国家公務員全般の受験者数が減少しているとも聞いており、また、例えば、他の公務員試験併願者が、裁判所以外の試験に合格していると、内定の連絡をしてもなかなかいい返事をもらえないこともあるようです。

裁判所職員は人気がないのではないかと、心配になることもあります。委員のみなさまから見て、裁判所の職員というのは、就職先としてどのように映っているのかということは、裁判所として非常に興味のあるところです。

本日は、裁判所職員に対する印象や、採用広報に対する取組への率直な感想などを伺いながら、委員のみなさまが所属している組織での工夫や、専門的知見・社会経験等を踏まえて、裁判所の採用広報に関する課題、また、学生にとってより魅力的で、効果的な採用広報の在り方について、御意見があればお聞かせ願いたいと考えております。

まずは、説明の全体を通して御質問や御感想をお聞かせください。

（委員）

一般職大卒程度の申込者数が、１０年前と比べて３分の２くらいまで減っているといった説明をお聞きしました。司法制度改革によってロースクールが設置され、１０年前は司法試験に受からないロースクールの卒業生が裁判所を受けていたのかなと思っておりますが、そのような実感はありますか。

（裁判所）

ロースクールを出て裁判所職員として働いている者も身近におりましたので、ロースクールの卒業生で裁判所職員の採用試験を受験する方が一定程度存在するとの実感はあります。

（委員長）

次に、裁判所は就職先としてどのように映っているのか、裁判所が就職先として認知されているのか、就職先としての裁判所の魅力やアピールポイントについて、何かお気付きの点等を御紹介いただけないでしょうか。

（委員）

私が所属している大学では、裁判所から業務説明会等をしていただいておりますが、昨年度の裁判所関係の就職者は０人でした。当校の卒業生の進路は、５０パーセントの学生が民間企業、１５パーセントの学生が教員、１５パーセントの学生が公務員、その他の学生が大学院への進学等となっていて、様々な職種に就職をしております。裁判所の職員も魅力的だ

と思っておりますし、実際に裁判所の業務説明会にも学生が参加しておりますが、おそらくまだイメージがつかめていないのではないかと思っています。こういう手続が必要だとか、こういう試験を受ける必要があるというところをもう少しＰＲしていただくと、学生がこういう職業で働きたいと思うのではないかと思います。当校のキャリアセンターの副センター長がどんどんＰＲにきていただければと言っておりますし、キャリア関係の授業でお話いただくこともできますので、そのような機会にＰＲしていただければよいのではないかと思っています。

（委員長）

公務員になる方は、どのような分野に就職されていらっしゃるのでしょうか。

（委員）

市役所の職員や警察などに就職しています。警察の方はよくキャリアセンターにＰＲに来ると聞いておりますし、いろいろな地域から学生が来ておりますので、故郷に戻って市役所に就職することも多いようです。

（委員長）

仕事がイメージできるかどうかが大切だということですね。

（委員）

親御さんが市役所にお勤めである場合には、親御さんの背中を見て、どういった仕事をしているかということが肌身で分かるのだと思います。倫理人権という授業がありまして、その授業に外部講師として弁護士に御説明いただくことがありますが、学生の関心は高いといえます。法律関係のドラマも放映されておりますし、法曹界に興味を持っている学生は一定数いるのではないかと思っています。

（委員）

一番の問題は、少子化の問題があるのではないかと思っています。出生率が１．２６と過去最低の数になったとの報道や、政府が異次元の少子化対策をとるといった報道もされております。また、私どもの短期大学の毎年の定員は６０人であるところ、高校生がなかなか当校に入ってきてくれない状況にありますし、函館市内の大学はどこも同じ状況であると聞いています。函館市の出生数が２０年前の１年間で２５００人であったのに対して、今は１年間で１０００人を少し超える程度であり、まもなく１年間で１０００人を下回る状況にもあって、圧倒的に子供の数が少ないといえます。私どもの短期大学の保育学科の卒業生は、保育園、幼稚園や施設に勤める者がほとんどです。毎年１２月には大体就職が決まるところ、それ以降でも幼稚園や保育園等から就職が決まっていない学生がいないかとの問合せが多数きておりまして、幼稚園や保育園も人手が足りない状況にあるといえます。

裁判所職員が就職先としてどの程度認知されているかという点については、私自身、今回の説明を聞いて、このような事務官等の仕事があるということを初めて知ったというのが正直な感想です。裁判所の職員についてもまだまだ認知されていないと思いますので、積極的に広報していくことが大事なのではないかと思います。

（委員）

いろいろ裁判所からお話をお伺いした上で思ったこととしては、裁判所に入った後のキャリア形成がどうなるのかが見えにくいという気がしました。事務官から書記官になるのが一つのターニングポイントであるところ、事務官から書記官になるということがどういうことなのか、書記官の希望者数に対して合格者の人数、書記官に任官すると転勤があるのかなど、裁判所に入った後にどうなるのかについてイメージをつきやすいようにしてあげると、学生も裁判所を希望しやすいのではないかなと思います。

（委員）

私は法学部出身ですが、大学生の頃に裁判所の職員というのをあまり意識したことがありませんでした。裁判所には裁判官だけが働いているとは当然思ってはおりませんが、それを支えている人がいるということがなかなか伝わってきませんので、裁判所職員の採用試験があるということを広報していくことが大事なのだと思いました。

ところで、今年度、函館地家裁に裁判所事務官が３人採用されたとのお話を聞きましたが、裁判所職員採用試験に合格した後、函館地家裁管内で採用されるということでしょうか。また、３人の方の出身は、函館だったのでしょうか。

（裁判所）

受験者の希望にもよりますが、札幌での勤務を希望されても、函館、旭川や釧路といった道内の他の裁判所で採用されることもありますし、採用された後に異動で希望の勤務地の裁判所に戻ってくることもあります。もちろん、函館での勤務を希望されて、函館地家裁に採用されたという方もおります。今年度新規に函館地家裁に採用された３人の職員は、いずれも函館出身者ではありません。

（委員）

裁判官にフィーチャーしたドラマの中で裁判官を支える書記官や事務官の方が出てきて、裁判官とのやり取りなどが放映されると、書記官や事務官の仕事のイメージが広がっていくことになると思います。テレビ局等にアクセスできる機会があるといいのですが。

（委員）

事務官の方は地域で採用されて、書記官になられた後もブロック単位で異動する一方で、家裁調査官は全国異動であるとお聞きしましたが、キャリアプランの違いなのかもしれませ

んが、どちらの職種もプロフェッショナルで働いていく中でその違いがどこにあるのかが気になりました。また、私も１０年前と比べて３分の２まで申込者が減っていることにはびっくりしました。

裁判所が就職先として認知されているかという点について、当社の職員にも法学部卒の者がおりますが、裁判所と併願したという話は聞いたことがありません。裁判所採用のツイッターを見たところフォロワーが相当数ついていて、裁判所を目指す方は、そもそも限定的な中での取り合いになっているのではないかと思いました。さらに裾野を広げるというときに、ユーチューブ、インスタグラムやツイッターを始めるのはいい取組だと思いますが、今更ですかという感があるのが正直なところです。それから、どういう人材を欲しているのかが少し伝わりにくかったのかなと思いました。事務官であればこういうキャラクターの方というのが、もう少しエッジが立つような形でお伝えいただけたら分かりやすいのではないかと思いました。なお、採用広報の動画において私生活まで食い込んだところを見せていくというところで、人となりが見えるところまで学生の心をつかもうとしていて、何とか変えていきたいという思いはよく伝わりました。

（裁判所）

事務官と家裁調査官の異動の相違点について、家裁調査官は総合職であるほか、少年事件では少年と保護者から話を聞かなければならないですし、家事事件ではいろいろな方の話を聞いて解決方法を導いていかなければならないため、広く全国異動をして、様々な経験を積むということがあるのではないかと思っています。

なお、書記官及び事務官においても、総合職の場合には全国異動になっています。一般職の場合は当該高裁管内での異動を行い職員を配置していくことになります。総合職で受かった事務官については、先ほど申し上げたとおり全国異動となっておりますが、札幌高裁で採用されますと、札幌高裁をフランチャイズとして東京に異動し、何年か経過したら札幌に戻り、さらに何年か経過したら東京に行くというパターンの動きが多いかと思います。

（委員）

家裁調査官補の申込者数の減り方が一般職の大卒よりも大きく、全国異動というのも影響しているのかなと思いました。私の組織でも同じですが、非常に難しい問題であると認識しています。そこを踏まえて、改革案を御検討いただければと思います。

（委員）

私は小さいころから法律に携わる仕事をしたいと思っていました。裁判所で働くということは研修制度が充実しているでしょうし、専門的知識を身に付けて、キャリアに基づいて多くの方の人権を擁護し、利益を守り、保護してあげたりと、職業としては、責任が重いとは

思いますが、やりがいのある仕事だと思っています。

ただ、市役所に行く機会は誰にでもあって、市役所に行くと多くの方が働いていてどのような仕事をしているのか、どのような雰囲気かが非常に分かります。一方、裁判所はといいますと、一般の方は裁判所に行く機会がほとんどありませんし、裁判所の中に入れば人が働いているのが見えますが、敷居が高すぎて、見学も安易にすることができる場所ではありません。裁判は公開されており、私も若い時に裁判傍聴をしましたが、裁判が終わった後に書記官から「どういう御関係で。」と質問されたりして、やっぱりあまり来てはいけないところなんだという印象を受けたことがあります。まずは親しみやすさがとても大事だと思います。裁判所において、業務説明会、大学や裁判所での説明会等を実施するなどいろいろ採用広報の取組をやっていらっしゃるところですが、就職を考える時期というのが高校に入って２年生あたりからで、抽象的ではあるけれどもぼんやりと考え始めるといったその時期に、裁判所に興味がある人はどうぞ裁判所にアクセスしてくださいというのではなくて、高校に出向いたりして、高校生を対象として、私たち裁判所はこういう仕事していますとアピールをすると、裁判所への興味を持って、就職選択の一つとして考えてくれるのではないかと思います。今の段階では見えない職業で、ドラマの中で見る仕事といいますか、現実世界からはかけ離れている、身近に感じないし親しみがわかない仕事だと思います。個人的にはやりがいのある魅力的な仕事だと思っていますが、その点が大きな問題の一つであると思っています。

（委員）

私は、調停委員として１５年が経ちました。調停委員になる前は、裁判所は固い役所、品行方正で勤勉な方が働く役所であるといった漠然としたイメージを持っていました。１５年が経った今の裁判所のイメージとしては、事務官や家裁調査官の方は非常に気さくな方が多いですし、オンとオフがきっちりできれば自分の趣味をきちんと楽しんでおられる方もいます。数年前に函館のバル街で女性の職員のグループと遭遇して大いに楽しんだということもありますし、産休でお休みをとっていらっしゃる、また復帰されたんだな、２番目のお子さんなんだなというのも見えまして、女性としてきっちりと育児休暇をとれるし育児後は仕事に復帰できる魅力的な職場だと思いました。もっと、女性にとって働きやすい職場であることをアピールしていただければよいのではと思います。

（委員）

少子化という話が出ていましたが、子供が少ない上に、親としてはいい就職先がないという理由で子供を函館の外に出しています。このような状況の中で、高卒でも職員として働くことができるという点、地元でも仕事ができるという点に光を当てて、中学校にでもパンフレットを案内していけば、もっと採用の裾野は広がっていくと思います。法律に関わってい

くという点については、裁判所に就職してから勉強すればよいというところをアピールするのも手ではないかと思います。

（委員）

事務官や書記官と聞いて、「官」とつくだけで敷居が高いというイメージが先立ち、「私はなれるのかな」と心理的なことが邪魔をして、受験しようとする入口まで行けないということがあるのかなと思いました。民間でもやっているようにインターンシップの受入れを学校などにＰＲして、インターンシップに参加してもらうことで、仕事を理解して雰囲気を感じてもらえば、裁判所職員としての魅力を感じてもらえるのではないかと思っています。

（委員）

一般の主婦の立場としては、これまで子供の就職先として裁判所を考えたことがありませんでした。敷居が高いし、高学歴が必要だし、刑事事件の関係者が出入りしているところで仕事をやっていると自分の気持ちも疲弊するし、悩み事もいっぱい出てくるので、裁判所はこわいところなので就職しないでという気持ちでした。しかし、今日の説明をお聞きして、裁判所はたくさんのことをしているという印象を持ちましたし、高卒でも事務官に採用されることがあると聞いて安心しました。少子化と言われていますが、そもそも裁判所という仕事のＰＲを学校等で見たことがありません。中学生くらいから裁判所の仕事がどういうものか理解してもらうために広報していただければと思います。

（委員長）

委員のみなさまが所属している組織で採用広報をどうされているのか、どのような工夫をされているのかといったことについて御紹介ください。

（委員）

私は、飲食店を経営しています。採用に関しては、ＳＮＳ等を活用しておりませんで、一般的なマイナビ、仕事ガイドやハローワークを利用して募集していますが、芳しくありません。そのような状況の中で、そもそも人数を確保しないとできない仕事という頭を変えようと動いております。先ほども少子化という話がありましたが、国がＤＸ化と言っている一方で、公務員の仕事はなぜＤＸ化されないのか疑問に思います。採用しなくても業務が回る仕組み作りの方が、業務が滞らない早道であり、優先事項であると思っています。

（委員）

検察事務官の採用に関しては、裁判所と課題が重なるところです。北海道においては、大学及び専門学校の大半が札幌に集中しています。そのため、優秀な学生を確保するために、札幌方面の学生をターゲットとして採用活動をしています。しかし、札幌から函館は遠距離であるため、函館地検で採用面接や業務説明会を行うとしても、札幌近郊の学生が足を運ん

でくれない状況にあり、採用に関する大きな障壁となっております。地元採用という点について、函館にある大学の学生は、公務員受験希望者が少ない、受験しても合格までたどり着いてくれないケースが多いため、地元の大学生の採用がなかなか厳しい状況にあります。

そのために、数年以上前から、函館地検の職員が採用面接や業務説明会のために札幌に出向くといったことをしています。しかし、採用面接の募集をしても、地元出身の大学生や専門学校生などを除くと、函館地検よりも札幌地検での勤務を希望される方が圧倒的に多いですし、札幌地検での面接は受けても、函館地検の面接は受けないという状況が続いています。函館地検においては、今年度３人が新規に採用されました。全員女性で、大卒２人、高卒１人、函館地検管内の出身者は１人といった状況です。

個人的な意見としましては、少子化が根本的な問題として横たわっていて、日本の喫緊の課題といえます。裁判所や検察庁も含めて国家機関としては、地元に残って地元の少子化問題を解決するという意味で、地元に国家機関の就職先の選択肢があるということをアピールしていく責任があると思います。先ほど大学生の就職先として警察が挙げられましたが、警察の方がまめに大学等に足を運んで採用活動に取り組んでおられるからであり、コロナ禍が続いたり、ＳＮＳが流行りとなると、ＳＮＳでの採用広報を考えることは理解できますが、裁判官や検察官はともかく、事務官、書記官としての仕事がＳＮＳで映えるのかという点については疑問があります。広報の一つの選択肢ではありますが、警察のようにまめに地元の教育機関に足を運んで、裁判所や検察庁などの国家公務員としての職業の選択肢が函館にあることをアピールしていく取組が大事であると考えているところです。

（委員長）

最後に、裁判所において、より効果的な採用広報を行うために、どのような方策が考えられるかについて、御意見をお聞かせいただけますでしょうか。

（委員）

就職してくれる若者を確保するということは、裁判所以上に私の会社でも非常に深刻になっています。

新聞記者の仕事は、物語やテレビドラマで取り上げられていて目立つ仕事であったのだと思います。受けにくる方は、社会のためにこういうふうに役に立ちたいなどと意思を持っている方が中心でした。最近、ネットの発達に伴って、あるいは人口の減少に伴って発行部数が落ちてきておりまして、仕事としての魅力を感じてくださる方が減ってきていると実感しています。新聞社の仕事は、夜も昼も通して仕事をし、事件があると現地に飛んで行って嫌がる人に話をしてもらうといったところがあり、その点に気後れしてしまう人が増えています。一方で、時間外問わず働くとか、そういうところにこだわっていては人が寄り付きませ

んし、人材の流出にもつながります。そこで、マスメディアも働き方改革をやっていて、長く働いてもらう環境作りに会社として力を入れるようになってきました。当支社の社員１３人中９人は女性で、その中には家庭を持っていて、子供を保育園に迎えに行くのに定時に帰る者も複数人おります。女性だけではなく男性も同様で、昔ほど睡眠時間を削って働くという感じではだんだんなくなってきています。

私どもの仕事もそうですが、裁判官、検察官や警察官といった目立つところの仕事はいいとしまして、裁判官を縁の下で支える事務官の仕事を理解してもらうことは大切だということを共感しました。「家栽の人」という漫画がありまして、主人公は裁判官ですが、そのストーリーの中には事務官も出てきます。事務官のみなさんも主人公あるいは脇役として、皮膚感覚でその仕事を分かっていただくような露出の仕方が何かないかなと思っています。働き易さや給与面、制度面だけではなく、仕事としての魅力を何とかアピールする新しい手段がないのか、函館だけで完結する事柄ではないのかもしれませんが、他の全く違う分野と連携して魅力を知ってもらう方策を探れるといいなと思います。

（委員）

函館マラソンがあり、裁判所の近くにもランナーが走っていたかと思いますが、「裁判所も応援しています。」とか、地域の中に存在感を増していくところがもっとあってもいいのかなと思います。お堅いイメージもしっかり狙いを持っていれば、あまり批判はないと思います。ツイッター等のＳＮＳも大事ですが、リアルに人が集まるところで面と向かってＰＲしていくということが大事なんだろうと思います。

以　上